

苦劳人の文学

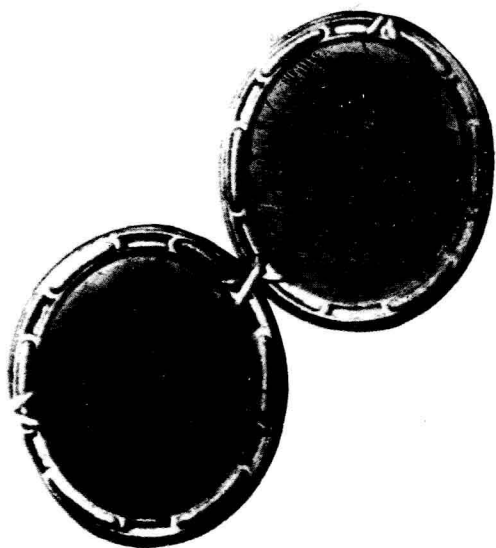
佐藤忠男



千曲秀版社

劳苦人の文学

佐藤忠男



千曲秀版社

佐藤忠男（さとうただお）

1930年新潟市に生まれる。1945年予科練に行き4カ月で復員。1949年新潟鉄道教習所を卒業後、国鉄、電信電話会社などに勤め、その間新潟市立工業高校卒業。その後、雑誌編集者となり「映画評論」、「思想の科学」の編集長を経て、評論家となる。

著書は、『日本映画思想史』（三一書房）、『日本映画理論史』（評論社）、『長谷川伸論』（中央公論社）、『忠臣蔵一意地の系譜』（朝日新聞社）、『家庭の甦りのために』（筑摩書房）、『読書と人間形成』、『映像の思索者たち』、『テレビの思想』（千曲秀版社）など多数。

現住所：東京都世田谷区松原5-10-4

苦勞人の文学

昭和五十三年十一月一日 初版印刷
昭和五十三年十一月八日 初版発行

定価 一六〇〇円

著者 佐藤 忠 男

発行者 石坂 重 明

発行所 株式会社 千曲秀版社

174 東京都板橋区宮本町三〇一
電話 東京 九六五一—四二一
振替 東京 八一—九六四三〇

装幀 秋山法子

印刷所 研友社印刷 製本所 大口製本

検印廃止。乱丁・落丁はお取換えいたしません。

© 0095—220011—4698

苦勞人の文学 II 目次

I 苦痛の文学

椎名麟三論 1 7

椎名麟三論 2 18

秋元松代論 30

松本清張論 1 44

松本清張論 2 67

二人の在野考古学者、

森本六爾と藤森栄一

82

II 苦勞人の文学

吉川英治論 107

山本周五郎論 119

長谷川伸論 141

Ⅲ 坊ちゃんの文学

大宰治論 161

日本浪漫派論 174

Ⅳ 苦勞人をめざす坊ちゃんの文学

野村胡堂論 187

坂口安吾論 1

坂口安吾論 2 228

203

あとがき 256

I
苦痛の文学

椎名麟三論 1

専検合格者

私が椎名麟三の文学にとくに関心を持つようになったのは、彼が専検の合格者であることを知ってからである。どの作品だったか思い出せないので無責任な言い方になるが、短篇小説のどれかの登場人物のひとりが、ぼくは専検に合格しているんですよ、と唐突に語るところがあり、それから私にとって、椎名麟三の文学が無縁のもでなくなった。

専検、正確には専門学校入学者資格検定試験と言い、旧制の学校制度において、中学を卒業していない独学者に旧制専門学校や旧制高校への受験資格を与える検定試験である。一九〇三年、高等学校令の施行とともに発足し、戦後、新学制への移行とともに大検（大学入学者資格検定試験）に移行したはずである。この制度について、少しくわしい知識を得たいと思ひ、教育関係の事典やかなり規模の大きい教育史などをいくつか調べてみたが、殆どなにも分らない。私の調べ方が足りないのかもしれないが、どうやら教育学者や教育史家からは殆ど関心を持たれていない制度であるらしい。それはそうだろう。専検は独学者のためにあった制度である。教育学とか教育史というものは、学校制度の

棹の中を順調にたどった人がやることにきまっているからである。

私は戦争中に小学校を卒業したとき、中学への入試に落ちて進学できなかつた。ちょうどそのとき、三つ年上の兄も病気のために進学できず、家で寝ていたが、進学した同級生たちに遅れをとらなため、専検をとるのだと言って中学の講義録を読んでいた。そこで私も専検に関心を持ったのである。結局、兄はまもなく死に、私も戦後、定時制高校を卒業することで、無理して専検や大検をとる必要はなくなってしまったのだが、順調に進学した同年輩の者たちがうらやましくてならなかつた少年時代の数年間、専検の二字は私の頭にかなり深くこびりついていたのである。

しかし、専検はものすごく難しい狭い門であることで定評があつた。私がさっき、この制度についてもっと知りたいと思つて調べてみたと思つたのは、主としてその難しさがどの程度だったのかということである。あるいは時代によって難易の程度も変化しているかと思つたが、大宅壮一が大正時代の半ばにこれを四国の高松の中学で受けたときには、数十人で受験して合格したのは彼ひとりだつたといふ。しかも彼のばあい、中学四年までは学校で学んでいざばぬけた秀才であり、思想的な理由で退学させられてから受験したのである。それでも、自分を退学させた中学を見返してやるという一念でクソ勉強したものであるという。四年まで秀才でとおつていた中学生がクソ勉強してやっと彼ひとりだけしか合格しなかつたということは、おそらく、当時の中学校を卒業できる学力を持つ中学生たちも、大多数はこの専検を受けたら落第したであろうことを意味している。

のちにこの話を大宅壮一から聞いて、私は憤激した。専検というのは、独学者にも進学の道を開いている良い制度であるように、少年時代の私は思つてゐた。私は勉強嫌いだつたからともかく、死ん

だ兄や、その友人たちの何人かは、たしかにこの制度を希望として少年時代の失意の日々を生きていたのである。ところがこの制度は、決して独学の少年たちに好意的なものではなかったのである。独学でも中学卒業と同等の資格を得ることができ、という幻想だけを与えておき、しかしじっさいには、とびきりの秀才の努力家にしかその資格を与えなかったのだ。考えようによってはこれは、かなり悪質な制度であったとさえ言えるだろう。なぜなら、これは、中学へ行けない貧民たちにも体制への信頼と立身出世の夢を与え、しかしじっさいには、たやすく階層移動はさせないというやりかただったからである。もったいぶりやがって！

そんな体験者の話を聞く前にも、私にはなにか、専検という制度はうさん臭く思えた。憧れていながら、あまりにも難しい試験だということを知っていてバカバカしく感じた。それに合格するためには夜も寝ずに肺病になるくらい勉強しなければならぬし、働いている独学少年にとっては、ただ肺病になる覚悟をしなければならぬだけでなく、おなじ職場の仲間と口を利くひまさえなかったであろう。それで感心な奴だと思われるような職場ならいいが、世の中には、そうまでして労働者階級から脱出しようとして目の色を変えているような少年が、むしろ嫌な奴だと思われるばあいも少なくないのである。なにしろ、その少年は、こんな職場になんかいたくないという一心で勉強しているわけだから、こんな職場でもなんとか満足したいと思っっているような仲間から見れば、ときには目ざわりなこともあるのではないか。ああ専検はどれだけ肺病を生み、どれだけ挫折を生み、どれだけ挫折した努力家の不満分子の嫌な奴を生んだことであろう。

椎名麟三の小説で専検に合格したことを自慢げに語る人物が出てきたとき、私は一瞬ギョッとし

た。もちろん作者は、たいていの人物をそう扱うように、その人物を情なさそうな人間として描いていた。したがってそこでは、自慢がそのまま皮肉になっていた。椎名麟三自身が専検合格を自慢しているわけではない。ただ、私はそこに、情なくもこだわったのである。椎名麟三は専検をどう考えていたのか。

彼が中学三年で両親の不和のために家出して、大阪で丁稚小僧や出前持ちや見習コックなどを転々とした一九二六年の十五歳のときは、自伝小説と銘うたれた『自由の彼方で』の前半にくわしく書かれている。「年譜」〔新潮日本文学・椎名麟三集〕によれば、この年、彼は、「中学の同級生より早く卒業を目ざし、独学で猛勉強し、専門学校入学者資格検定試験に合格した。自然科学の書物にひかれ、ファアブルの『昆虫記』、ダーウィンの『種の起源』、モルガンの『古代社会』、ペーベルの『婦人論』等を読むように読んだ」とある。専検がどんなに狭き門であったかを考えれば、いかに彼が秀才であっても、たしかに「猛勉強」したに違いないのである。しかも専検合格に必要な以上の読書までしているのである。ところが『自由の彼方で』を読むと、当時彼が、どんなにひどい労働をし、女給や不良じみた男たちなどにどんなふう虐待されていたかといったことはくわしく書いてあるが、「早稲田大学の講義録」などをとって勉強していたことは、ほんの一、二行、それも女給の関心をひくためだったと書かれているだけである。専検のことはこの小説にはなにも書かれていない。もちろん、専検のために猛勉強している少年なんて、このあと間もなく左翼運動に参加し、挫折し、入獄し、その絶望を直視することから己れの立場を確立しようとするようになった椎名麟三にとっては、もはやたいして意味のない、それこそ女給の関心をひくためにいい格好していたにすぎない

と冷やかし半分を書く程度のことだったに違いない。しかし、当時十五歳の彼にとっては、決してそんなものではなかったはずなのである。十五歳の少年にとっては女給の関心をひくことはもちろん重大であるが、しかしそれだけでは専検の猛勉強はやれるはずがないのである。

もちろん『自由の彼方で』は自伝小説ではあっても自伝ではない。当然事実とはかなり違うはずである。そして、どこをどう違えたかということに作者の求めている何かが現れてくると思う。私には、このところの違いに重い意味が感じられる。単純に、自分を立志伝中の人物のように描くことは気恥しかったからだろう、という程度に解釈したのではすまされない気持である。

もてあます向上心

椎名麟三は少年時代に下積みの労働者として辛酸をなめた。そこが作家として彼を他の人々からきわだたせるひとつの大きな特色となっている。しかし、作家仲間においてこそ労働体験はきわだった特色であっても、当時の社会状況においては、むしろそれは、かなりの程度まで当り前のことだったはずである。下積みの人間の多くは椎名麟三が経験したような労働を経験したわけだし、下積みの人間のほうが社会の圧倒的多数派であったことは言うまでもないことである。椎名麟三が人より変っているのは、下積みの辛酸をなめたことではなく、そのような状況で専検に合格するほどのすさまじい猛勉強をし、さらにそれ以上に読書したことである。これはじつに異常なことだと言わなければならぬ。なぜ彼はそんな途方もない努力をしたのか。

彼は中学三年で家出して社会に出たが、当時中学への進学率は数パーセントにすぎなかったはずで

あり、中学へ進学したというだけで、すでにエリートとしての誇りを持つことができたはずである。彼は田舎の小学校を卒業して兵庫県立姫路中学校に進学したのだが、その村の小学校から姫路中学校に進学できたのは彼ひとりだったそうである。いわば、村の輿望を一身に背負ってエリート校へ駒を進めたというかたちだったのである。両親の不和による家出でそのエリート・コースから外れなければならなかったことが、いかに残念でないことであつたかは想像に難くない。いちおう、それだけでも彼の異常な努力の動機を説明することはできる。じっさいには、そういう動機で専検を目ざしても大多数は脱落するのだが、彼にはそのうえ、もうひとつの内的な衝動が重なつていたことであろう。それは両親の不和によるみじめで不安な境遇からの脱出の願ひである。まもなく母が自殺したことは彼の作品にたびたび書かれてゐるし、父も後年自殺しているという。彼が猛勉強していた時期にはまだ両親は自殺してゐなくても、すでに死の影は感受性の強い少年の全身にのしかかつていたにちがいない。その死の影と戦うひとつの方法として、ひたむきに向上するという道が選ばれたものであろう。いくら努力して向上しても死は確実にやってくる、というのは椎名文学の主要なモチーフのひとつであるが、ふつうの人が分りきつたこととして問題にしないそんなことを、あえて大真面目に議論するというのは、彼がじっさいにその方向で努力向上した人だからである。

ひたすらに勉強して向上しようとすることは、学校制度の内部においては正常なことである。しかし少年時代の椎名麟三が転々としていたような下積みの社会では決して正常なことではない。彼が不幸なことは客観的な事実だが、おなじような生活水準にある仲間たちの中では、彼は主観的にことさらに不幸であつたにすぎないかもしれない。そういう人間を仲間はずさないものである。自分とおな

じとしか考えないような人間が、主観的にきわだって不幸に見える態度をしているということは、自分が現状をマアマアと評価していることに對する侮辱でもあり得るからである。

『自由の彼方で』に、椎名麟三の少年時代を思わせる主人公の清作が、不良の先輩から路上で小突かれて、たいして強くやられたわけでもないのにわざわざよろけてショーウィンドーのガラスに頭からつんのめって怪我をするという有名な一節がある。そこに椎名麟三は、わざわざ血を流してみせることによって周囲の人々の同情をあつめ、自分を迫害する相手のRに心理的な圧力を加える弱者の抵抗であるというような意味の説明を加えている。たしかに結果としてはそれはおりのことであり、二度三度と繰り返されることによって主人公自身そう意識するようになったであろうことは充分に想像がつくのだが、最初そうされたとき、ほとんど無意識のうちにそういう行動を選ぶということがじつに微妙である。その無意識の部分、私はこんな想像で埋める。清作は明らかにこの不良たちの暴力の被害者だが、一面からすると、この不良たちの属している状況を徹底的に軽蔑し、この境遇そのものを過度におとしめているという点で、その場にいる人々に、すでにある心理的な圧迫を加えていたかもしれないのである。したがって、ある程度までは排斥されて止むを得ない存在かもしれないのである。そしてたぶん、清作自身、そのことを暗黙のうちに認めているのである。彼は、この境遇をきわめて情なく思いながら、同時に、そう思う自分自身は罰せられてもやむを得ないと思っていないのではないか。なぜなら、この境遇を情なく思うということは、その境遇に満足している人々を軽蔑することであり、清作はどうやら、自分にはたしてこの人々を軽蔑する資格があるかどうかを強く疑っている風情だからである。

当時、彼はすでにエリートコースからは排除されている。自分を排除したそのコースに追いつこうとして彼は専検をとった。しかし専検というのは専門学校なり大学なりへの進学の踏み台として利用してこそ価値があるのであって、その目的以外にはただ本人の自己満足にしかならないものである。もちろん、その自己満足だけでもいいという無邪気な人々もいる。しかし椎名麟三は決してそれほど無邪気な人ではなかったはずである。『自由の彼方で』は彼は共産主義の理論をまるで知らずに自称共産黨員になった、というふうに書いているが、それは、すでにキリスト教徒となって、神の目から見たら自分はどんなに無知な人間であることか、という考え方をするようになってからの意識がそう書かせているのではないか。「年譜」によれば、彼は小学校上級生のころにすでに「中央公論」や「改造」を読み、大杉栄やクロボトキンの名を知っていたという。その知識がどの程度のものであったかはともかくとして、少なくとも、彼は、その知識から、労働者階級を軽蔑してはならない、という観念は得たと思う。その観念が、下積みの生活のなかで血となり肉となったのだ。あるいはそこで彼は、自分自身の猛烈すぎる向上心をもてあましたと言っているかもしれない。下積みの人間にとって、勉強し、向上し、特権的な立場を得ることは、可能性としては労働者階級への裏切りを秘めている。ただし、そんなことは順調にエリートコースを歩む者にとっては意識にものぼらないし、意識にのぼっても自分を正当化する理論はいくらでも考え得る。ところが、椎名麟三が当時おかれていた立場は、そのことを彼に強烈に意識させずにはおかなかったであろう。エリートコースからふり落とされ、下積みの境遇の情なさに涙し、しかも彼は、労働者階級を軽蔑することは許されないという思想を知っていた。